

『パル判事』を上梓するまで

中里成章

途上国の研究はいかにあるべきか？ 研究者の社会的責任はどうか？ 『パル判事—インド・ナシヨナリズムと東京裁判』（岩波新書）の著者であり南アジア近現代史を専門にされる中里成章（なかざとなりあき）東京大学名誉教授をお招きして、同著作の執筆の背景とともに、右のような「難問」についてもお話しいただいた。

●東京裁判への関わり

これからの話は私の個人的な体験に基づくものです。私は一世代ぐらい皆さんと離れています。そういう人間の話でも役に立つことがあるのでしょうか。心配ですが、まず、私の生い立ちと学んだ時代背景、および『パル判事』のための調査の経緯をお話しし、最後に、研究者・知識人の社会的責任というものについて、非力ながらできる範囲で触れたいと思います。

会ったことがありません。戦死したためです。私が小学生ぐらまでは、父は酒に酔うとよくその戦死した弟のことを語っていました。語りのパターンは決まっています。暗記できるほどでした。父の弟は兵隊に取られて佐世保にいたときに、航空兵の訓練に志願したそうです。戦争末期に戦闘機乗りになるといふことは、死ぬというのとほとんど同じ選択だったでしょうが、彼はそれを選択して訓練を受けた。父は彼が出陣する直前に二人だけで会ったそうです。小学校しか出ていないのにパイロットの訓練を受けるといふのは、大変な努力がいったらだろうが、会ったとき目は澄んでいて、死を覚悟していた

のだろう。そのような内容の話を何回も聞かされました。特攻隊とは違うのですが、普通の兵士の死に方ははなかつたのです。肉親にとつてはトローマティックな体験であり、記憶に深く刻まれたのでしよう。

父の語りにはもうひとつの話が続くのが普通でした。それは今日の話に関係する東京裁判のことです。父は弟の話の後、東京裁判の話に移ります。まず東条英機の話が出る。東条は戦陣訓を作り、生きて捕虜になつて辱めを受けるなど言っておきながら、自分は自決することすらできず、捕虜になつて裁判を受けている。あれはなんだ、ということ。それから、東条のはげ頭をピシャッと叩いた大川周明の話もします。大川の狂言にちがいないと言うのです。そのように東京裁判の話に飛躍するのは、日本の指導者が若者を死に追いやつておきながら、戦争責任を果たしていないことに対する憤りがあつたからだろうと思います。こんなことなら弟は死ぬことはなかつた、という思いも重なつていたかもしれませぬ。父は自民党でも右寄りの派閥の支持者のほうですが、当時は右翼とか左翼とかとは関係なしに、まったく違う次元で戦争体験が語られることがあつたと思います。

私は中学校一年生のときに、父に連れられて靖国神社に行きました。ところが、本殿まで行つても父はお参りをしません。中を覗いて「靖国神社はこうなっているんだな」と言い、それでお仕舞いなのです。その後私は、右寄りの父でも、弟が神になつたなどとは認めたくないのだからと理解するようになりました。

そのような戦争の受け止め方、あるいは戦死者への追悼の仕方というのが我が家にはあり、子供の頃から触れていました。ですから、私にとつて東京裁判というのは、小学生の頃から身近なものとして記憶に刷り込まれた、歴史的な出来事なのです。若い方とは違う戦争の記憶の仕方であり、東京裁判への関わり方です。記憶にはないのですが、パル判事のこと話のなかに出てきたのだからうと思ひます。もちろん、パル判事研究に関しては、歴史研究者としての節度をもつてやつたつもりです。

●六〇年代までの社会的責任論

私は一九六五年に東京大学に入り、六七年に文学部東洋史学科に進



学してアジアの歴史の勉強を始めました。今の若い方々には想像もつかないだろうと思いますが、日中戦争等のアジア侵略のことがありますので、戦後の東洋史学にとっては戦争責任、戦争体験の問題は非常に重要で、それを総括したうえで東洋史学というものをやらなければいけない、という意識がありました。しかし、いわゆるノンポリで、そういう政治的な意識なくして東洋史学科に入った私は、先輩からいろいろ勉強しなければなりません。そのときに読むように薦められた本は、当時の雰囲気をよく表していると思います。その一冊は仁井田陞という中国法制史の大家の本でした。この人は若くして学士院賞恩賜賞をとった、表面だけ見れば官学アカデミズムの代表選手のような研究者です。薦められたのは『東洋とは何か』という一般向けの読み物です。「編者あとがき」の一部を読み上げさせていただくのがよいと思います。

「日本の代表的な中国法学者、仁井田陞氏（一九〇四～一九六六年）

の生涯は、終始アカデミックな態度で貫かれていたので、とくに劇的なものはない。それにもかかわらず、彼は、時代とともに、研究者の社会的責任（ここに社会的責任という言葉がでてきます）を自覚し、ことに第二次世界大戦終結の前後、日本の権威主義の崩壊を体験し、それは自己の学問の問題意識の根底に大きな衝撃を与えた。彼自身、自己の学問を前期と後期に分かつ理由はここにある。」

中国法制史という地味な分野の研究に没頭してきた研究者でも、戦争からそれだけの衝撃を受けた。ここから先が重要なのですが、この先生は一九五三年に天皇家の御講書始めに招かれ、魯迅の『藤野先生』と『阿Q正伝』を講じている。昭和天皇の前で魯迅について講義するのは、かなり勇氣のいることだったろうと思います。仁井田陞は、私たちが東洋史を勉強し始めた頃にはよく言及される人でした。

それではインド史についてはどうだったか。一九七〇年代のことになりますが、私が習った何人かの先生のなかに荒松雄というインド中世史の専門家がいました。彼は学徒出陣を体験した。東大の総合図書館の前の広場で整列して出陣式をやり、そして出征したという。にわか仕立ての少尉にさせられて、海岸で塹壕掘

りをさせられた。部下たちは皆古兵で、家族がいるような兵士を指揮して一緒にやったという。それは米軍上陸を想定しての陣地作りでした。もし米軍上陸となれば、彼は生きていたかどうか分からないのですが、幸いにして生還できた。荒先生はその後大学に戻り、戦後の日本のインド研究の草分けになった。インド史研究会という研究会を立ち上げ、インド研究の道を切り開きました。彼はどのようにしてインド研究を立ち上げたのか？ 戦前からインド研究はありました。しかし、それと絶縁するところから戦後のインド研究を始めたのです。彼の戦争体験を考えると、それまでのインド研究と絶縁したことは理解できる。戦後のインド研究の立ち上げにも、戦争体験と戦前のアジア研究のあり方への反省が結びついていたわけです。

このように社会的責任論というのは、我々が東洋史を学び始めた頃には、周りに空気のように存在していた。それを考えない東洋史研究というのはいない、という考え方が支配的だったのです。私が大学四年生だった一九六八年に、全共闘運動が起こります。東大の本郷では大学院生が主体でしたから、私などは子ども扱いですが、たくさんの方が真剣に運動に加わった。その背景についてはさまざまな解釈があるでしょう

うが、さしあたり、第一に、時代の影響があると思います。日韓条約締結、ベトナム戦争、文化大革命などがあつたなか、我々はそれらと無縁ではあり得なかった。少し離れますが、アフリカの動きを追っている人もいて、フアンなどのことが語られてはじめていた。第二に、私たちは戦争体験を背負っている先生に教わった。目の前で彼らは話しているわけですが、我々は彼らにはなれなかった。彼らの気持ちは分かるが、それは我々自身の問題ではない。そればかりでなく、彼らが戦後社会でどのように生きて来たかという問題がある。それならば、彼らの研究を乗り越える仕事をするための立脚点は、どこに求めるべきだろうか。つまり、戦後歴史学の行き詰まりが六〇年代には明らかになり、我々はどうするべきかという問題があつた。それは一種の空白感として意識されていたと思います。それは同時に、今日の主題と関連させてまとめれば、戦中派流の社会的責任の取り方に限界が見えたということでもありうろのか。さまざまな模索があつたと思います。私自身はだんだんとフランクフルト学派の批判理論にひかれてゆきました。

その後、私は大学院でインド近現代史研究を始め、カルカッタ大学に

留学します。

●日印関係史への関心

私は日印関係史に興味がありました。『パール判事』を読むと、私が日印関係史という分野など大嫌いな人間だと思いかもしれませんが、実はそうではないのです。理由は二、三ありますが、ひとつには、先ほど述べた空白感を埋め、戦後の研究の行き詰まりを打ち破りたいということがありました。いろいろと模索した結果、見つけたなかのひとつが戦前のアジア連帯論だった。

ちょうど先輩がインドから帰国して、大川周明研究会をやるから入らないかと誘われました。一九七五年ごろのことです。大川周明の著作を読み報告しましたが、つまらなしいと思いましたが、確かに情報がたくさん盛りこまれていて整っているのですが、心を動かすものをこの人は持っていないと感じました。その研究会では「インド国民軍裁判をめぐって」という論文を書いたのですが、それを読んだ別の先輩から「君は腰が引けている。遠慮している」というコメントをもらいました。その言葉が私の心にずっと残り、それに対する回答のひとつという意味ですが、『パール判事』にはあります。腰をためてもっと踏み込むとはどういうことかということですね。

この研究会にはアジ研の南アジア

研究者が加わっていて、彼から国際学友会問題や、アジアからの留学生の問題に関わらないかと誘われました。国際学友会というのは、戦時中からアジアからの留学生を受け入れてきた国の外郭団体です。建物は新大久保駅の近くにありました。しかし運営にゆきづまって閉鎖され、留学生が放り出されてしまう。支援運動が始まり、その末席を汚す形で加わるなかで、田中宏さんや荻田セキ子さんなど、留学生問題に熱心に関わっている方々が何を語り、何をやるか、この眼でみる機会をえました。アジアとの関係をこれほどまじめに考えている人がいることは驚きでした。田中さんの師は穂積^{ほづみ}五^ご一^{いち}氏^しで、駒込にあるアジア学生文化協会の創設者です。思想的には右翼に位置し、アジア主義というものを実践した人と聞いています。日本のアジア主義を誠実に実践するかどうかということになるか、初めて知り、大川周明よりはおもしろいと正直思いました。留学ということがあったので、この問題はそれで終わりましたが、私のアジアに対する関心、方向性のどこかに、このときの体験が生きているのではないかと思うことがあります。政治イデオロギーとして振り回されるアジア主義に対する違和感や不信感もそのひとつかもしれません。

●ボースの足跡を辿る

一九八五年に留学から帰ってから数年経って、大川周明研究会の延長線上で、光機関係者聞き取り調査、そして東南アジア・インド現地調査旅行に参加しました。光機関というのはインド国民軍を組織するための特務機関です。私は四人のインタビュを担当しました。私が先のアジ研の先輩研究者に感謝しているのは、文献調査とかインタビュよりも、とにかく現場に行ってみなければならぬと、彼が強く主張したことです。それで調査旅行を三人で行うことになりました。

バンコクから始めてカンチャナプリー、そしてバンコクへ戻り国際列車でペナンとクアラルンプルへ、そして、シンガポール、カルカタへ、それからインパールに行きました。一週間くらいの旅行でしたが、それはチャンドラ・ボースのインド国民軍の足跡をそのまま辿るものでした。そのとき私を感じたことは、日本で言われていることには大きな誇張があるということです。要するに、イデオロギーが先行した形でフレームワークができあがっており、実際は大きく違っていたということ、自分で歩いてみて納得させられた。インド国民軍とはどういうものか――私は、パール判事はインド国民軍のシンパサイザーだと考えていますが――

そのとき実態を知りました。私を連れて行ってくれたお二人も、同じ気持ちであったと思います。『パール判事』ではインド国民軍についていろいろ書いていますが、試行錯誤があつて否定的な結論に達したのであつて、先験的に日本ファシズムの協力者はいけないと言っているわけではありません。

●留学から得たもの

先ほどのアジア連帯論に戻りますと、私は一九七九年から八五年まで五年余りカルカタ大学に留学していたのですが、そのなかで、インド人が日本をどう見ているかが分かります。チャンドラ・ボースは、日本では騒がれているが、インドでは比較的小さな歴史的記憶として残っているにすぎないことも分かります。そして、日本ではよくアジア主義ということが言われ、インドでもアジア連帯ということが言われますが、同床異夢というのでしょうか、両者はずいぶん違うことを感じざるをえませんでした。日本のアジア連帯論は、自由民権運動期に生れますが、まもなく思想的には空洞化して、日本軍国主義の国策に吸収され、「大東亜共栄圏」のイデオロギーに墮してしまいます。竹内好の名言をかりれば、「大道すたれて仁義ありで、アジア主義ほろびてアジア主義を称

する議論が横行した」わけです。これに対し、インドで言うアジア連帯というのはあくまで「夢」にすぎません。彼らにとつて、アジア連帯は理念としてはあり得ても、実践的課題としては立たない。なぜかという、最強の帝国主義国イギリスの支配があつて、その力で海外から遮断されていますから、自分たちの力で独立を勝ち取るほかに道がない。もちろん連帯というのは好ましいことだから、試みはありましたが、国境の向こう側から日本のアジア主義というものを遠望して、自分なりの見通しを持つことができたような気がします。

カルカッタ大学では、植民地期のベンガル農村史について博士論文を書き、その間いろいろなことを勉強しました。重要なのは二つです。ひとつはインドの実証史学を学んだことです。当時のカルカッタ大学はまだインド実証史学の中心であり、その最高レベルを知ることができたのは、収穫であると同時に、衝撃でもありました。私は、日本で勉強したことは御破算にして、彼らのやり方を一から学ぶことに決めました。

第二に、その頃のカルカッタでは「サバルタン・スタディーズ」がちようど立ち上がっているところでした。パルタ・チャタジーもギヤーン・パンデーもまだ若く、親しく付き合つてくれました。日本では社会的な（あるいは民衆史的な）研究が盛んになつてきたころのことで、初めは、インドでも似たようなことが始まつたのかという程度の認識でした。しかし間もなく、パルタ・チャタジーが院生向けに行つた授業に参加させてもらう機会があり、そういう認識は改めなければならぬと気づかされました。彼らがいわゆる「言語論的転回」を行うずっと前のことです。西欧の現代思想の動向を幅広く捉えた上で始められた意外にラジカルな運動だということを理解し、それ以来、彼らが言及する現代思想物を細々と読むようになりました。それからずっと年月を経て、「サバルタン・スタディーズ」に学びつつも、彼らとはやや違う視角から、Harish Chandra Mukherjee というジャーナリストを素材にして、インド・ナショナリズムの起源について論文を書いたことがあります。パルタ・チャタジーはめずらしく誉めてくれましたが、それを聞くうちに若い頃のことを思い出されて、くすぐったいような、肩の荷を下ろしたような複雑な気持ちでした。

『パル判事』ではポストコロニアリ批判について割合批判的に言及することになつてしまいました。そういう次第ですので、私はポスト・モダンの研究一般に否定的なわけではありません。ただし研究輸入業のようなものに抵抗感を持つていることは確かです。「サバルタン・スタディーズ」はインドの新左翼系の研究者が始めたものです。それが日本に輸入されると、政治性が綺麗に消去されてしまつて、何か別のものに変わられてしまつたと思つています。

留学から帰国後二年間、仕事がなく路頭に迷い、それから東洋文庫で一年間、神戸大学で六年半勤め、東京大学東洋文化研究所に十四年半おりました。その間ずっと異邦人のような気持ちでいたと思います。インドに長く留学した者が日本社会に復帰する―これを我々はリハビリと呼んでいます―には、時間がかかるわけですね。一年、二年とかかる。しかし私の場合はついにリハビリができて、定年まで勤めました。

最近、東洋文化研究所のなかに「日本の研究はガラパゴス化している」という人がいました。それを聞いたとき、「それだ」と思いました。日本の研究者は皆一所懸命やっているわけですが、その中にはどこかガラパゴス的な仕事をする人たちがいて、なじめない印象があつた。インド史研究では、指導的立場にある研究者の一部にそれが顕著で、インド人研究者なら「それはデリーでは通用しない」と言うだろうと思うところがよくありました。

以上が『パル判事』執筆にいたるまでの私の歩みです。何をもちつて自分の研究を支えて行くのか、なかなか分からない。立迷いの気分というにいたつたというのも、それが背景にあつたと思います。今日のお話の文脈で言えば、日本ではポピュラーなアジア主義、アジア連帯論（頼み）の状況から脱却しなければならぬとしたら、どういう形でアジアの人たちと友好的な関係を結びながら研究することができるのか？ その根拠というのはどこにあるんだろうか？ なかなかつかみきれずに今にいたつた、という感じがいたします。

●パル判事にゆきついた次第

さて『パル判事』ですが、最初は書こうと思つていませんでした。流れに流されたり、偶然が多分に作用しました。偶然を生かすのは、文系の研究でも案外大事なのかもしれませんね。その経緯をお話したいと思います。

あるとき若手研究者が苦情を言い始めました。若い研究者が書いたヒンドゥー・ナショナリズムに関する本を読んだのだが、自分は納得がいかない、ああいう研究でいいんですか？ と言うのです。私はまだその本を読んでなかったので、読んでみ

ました。果たして、その人の言っていることが当たっているなど思いました。日本でいえば武闘派の右翼にあたるヒンドゥー過激派の言動に最大限の理解を示す一方で、彼らに迫害され殺されるムスリムの立場は一顧だにされていないのです。世界的に見ても類のない本です。そういうものが自分の国に出現したことに私はいささか驚かされました。その後インド・ナシヨナリズムと宗教に関する大部な本が出版されると、ある院生が、先生問題じゃないですかと言います。それもあとになって読んでみると、なるほどそうでした。そして、そういう本を書く人が賞を取るようになってゆく。私は、どうしてだろう、と素朴な驚きを感じました。ただ、私は現代インドの専門ではないので、現代インド政治の研究者が批判すればよいことだと思いました。院生たちには、同年代の若い研究者がたくさん書いているのだから、あなた方もちゃんと論文を書きなさいと言って、院生支配の恰好の手段として使わせてもらっていました。気持ちとしては、またガラパゴスが現れたなという感じですね。自分にはあまり関係がないと思っていたのです。ところが自分自身が巻き込まれる事態になりました。二〇〇六年の五月に朝日新聞の取材があったのです。

「歴史と向き合う―戦争責任」という企画を立てて、パール判事を取り上げたので、ぜひ意見を聞きたいということでした。二人の記者に会ったのですが、彼らは、インド近現代史におけるパール判事の位置づけはどういうものなのか？ それから、インドのナシヨナリズムの思想のなかでパールの思想はどういう位置を与えられるべきなのか？ という質問をしてきました。私は心のなかでは、過大評価もしい加減にしてほしいと思いましたが、口では、パールというのはそもそもインドの歴史の教科書に出てくるようなレベルの人ではなく、もつとずっと普通の人で、と答えました。ところが彼らは全く納得してくれませんでした。私は説得に努め、ややあつて彼らは方向を変えて、「現在のインド研究というのはどういうふうになり立ってきたんでしょうか」と訊く。私は先ほどの荒先生を引き合いに出し、戦前の研究から断絶した所から始まっていると答えました。戦後のインド研究を立ちあげた人の言葉をそのまま伝えたのですが、驚くべきことに、新聞社の人たちは信じてくれず、そんなことはあり得ないという感じで、質問を続けてきます。戦前のアジア主義や大東亜共栄圏の思想の延長線上に、現在のインド研究が成り立っていると信じているとしか思え

ない。私は、これは容易ならざることだなど思いました。二時間は話をしたのですが、パール判事についてもインド研究についても、彼らの考えを正すことができたとは思いません。それは、「歴史と向き合う」という特集が掲載されたときに、確認せざるを得ませんでした。そうして、特集を読んで初めて、院生などに批判されている若い研究者が、その企画の中心にいたことが分かったので

どう考えても、『パール判事』を書いた大学の准教授よりも、「私は漫画家です」と言っている小林さんのほうが冴えた議論をしているのです。それはなぜかということになります。強力なブレインがついているという話を伝えたことがありますが、いずれにせよ、いわゆる保守論壇というのはなかなか手強いものだと、そのとき理解するようにになりました。そういうわけで、だんだんと『パール判事』を書く方向へ流されてゆくのです。

その後、二〇〇七年の一〇月一日になりましたけれども、その本の書評が朝日新聞に出ました。それを読んで私は納得できなかった。書評はその本を、日本の護憲派にとつての必読書かもしれないと言っている。パール判事は日本軍国主義を免罪した人だと私は思いますが、そのパール判事をガンディー主義者に祭りあげて非常に肯定的に扱った本を、護憲派は読まなければならないと言っているわけです。私は「不思議の国のアリス」のような気持ちになってきました。私は朝日新聞の書評欄に手紙を書き、「東京裁判後日本の戦争指導者と親交を結んだパール判事が、一貫して熱烈なガンディー主義者だったということになれば、大東亜共栄圏をスローガンに掲げて戦争指導者が行ったことは、ガンディー主義の

許容範囲にあったということにならざるをえません」と述べました。

私は数年来、インド・パキスタン分離独立がなぜ起ったのかを、社会的経済的背景から解き明かすことをメインテーマとして研究していましたが、ガンディーと日本のファシズムとに通じるものがあるということになると、私は一九四〇年代をとらえる枠組みを、根本的に考え直さなければならなくなります。実は、実際そういう説を打ち出した人がいます。インド近代史を専門とする教授がガンディー親日説を打ち出している。日本軍がビルマに攻め込んだときに、インドは大混乱に陥ります。インドの民族主義者にとって、日本軍にどのように対処するか、切実な問題になった。そのとき、その教授によれば、ガンディーは親日的になったという。私は「日本軍の南方作戦とインド」という論文を書いて、批判的な見解を表明しました。ガンディーはせいぜい英米と日本の間で中立的な立場を取ったにすぎないというのが私の結論です。詳しくは拙論をチェックしていただくと、ここまでくると、バル判事の問題は、私自身いちばん大事に思っている研究と骨絡みになってくる。しかしそれでもなお、『バル判事』を書く気にはなれませんでした。私は分離独立の研究をどんどん進めたいと思っ

ていました。

私は一年に二カ月位インドに出張して文献調査をすることにしています。二〇〇八年九月に文献調査をしたときのことです。予定していたより早く調査が終わわり、時間が空いてしまいました。そこでフェデレーション・ホール協会に行こうと思いい立ちました。同協会はバル判事が会長を務めたことのある民間団体です。アポも取らず飛び込みで行った私の相手をしてくれたのは、事務局長のビモル・ラエという人でした。彼は英語を話さなかったのですが、ベンガル語でインタビュしました。彼の父オナト・ラエは、バル判事とはプレジデンス・カレッジから親友の間柄で、その縁でバル判事が彼を協会の事務局長にしてくれたとのことでした。そこまではいいのですが、それに続けて彼が言うには、自分の父はテロリストだったというのです。私は耳をそばだてました。ラエさんのお父さんは、ベンガル分割反対運動に加わってオロビンド・ゴシユの心酔者になり、テロリスト・グループに加わった。官憲に追われてヨーロッパに逃れたが、ヨーロッパから帰ってきて服役して出獄。その後チャンドラ・ボースの支持者になった。第二次大戦中、チャンドラ・ボースはインド向けの宣伝放送をするのですが、それをカルカッタ市内

で聞き取ってピラにして、極秘に配ったという。それを聞いて初めて、これはバル判事をやるしかないと思つたのでした。

●偶然がかさなった調査

このようになったのはまったくの偶然によるものです。幸いにしてそういう風になって、それまで漠然と心のなかにあつたものに、形を与えてゆく緒をつかめたわけです。日本で信じられているのは全然ちがつた。バル判事像を描いて、東京裁判論争や歴史認識問題に一石を投ずることができるといふ、確信のようなものができました。

このインタビュがきっかけになって『バル判事』の執筆へと流れてゆくのですが、まずは、そのときまでに集めた材料をもとにして「訳注・ラダビノド・パール博士略伝」という論文を書きました。それを贈呈すると、前述の朝日新聞の記者がおもしろいと言って取材にきてくれたのです。そうなる、これは引っ込みがつかないという感じになる。それから、私の弟が出版の仕事をしていて、おもしろい、岩波新書で出すのはどうかと言ってくれました。簡単に本にしてくれる出版社ではないのですが、紹介してくれる方がいて幸い出版する運びになりました。

この本は文献調査とインタビュ

の二つを土台にしています。私は歴史畑の人間ですから、文献調査が主なのですが、インタビュも大切だということ、光機関の聞き取り調査で学びました。結局、何が幸いするか分からない。あまりが進まなくてやったことでも、後になって生きてくるわけです。

先ほどのフェデレーション・ホール協会の話に戻りますと、自分の父はチャンドラ・ボースの支持者でテロリストだと言われた時、私はラエさんに、バル判事についてもっと調べたいと言つたのです。そうしたら「バル判事の長男がいるが、会いますか？」と答えが返ってきて、是非ともということになった。二日後にカルカッタの盛り場のゴリハトというところの交差点まで来なさい、と言われました。私は半信半疑でした。バル判事の息子さんはプロシヤント・パールというのですが、インタビュ嫌いと言われていました。ラエさんとはというと、気さくな方ですが、相当に忙しい感じで、そもそもプロシヤント・パールさんとはそんなに親しい関係にあるように見えないう。それでも指定の場所に行くと、ラエさんは既に来て待っていてくれました。それも片手にはお菓子のお土産をさげて。私は手ぶらで行つたので恥ずかしい思いをしました。

プロシヤント・パールさんは、会っ

は何を仄めかしたのか。それを明らかにできるかが焦点でした。独立の前年、インド国民軍将兵の釈放運動があり、デモ隊に警官隊が発砲し学生が死ぬということがあったのですが、思い切って質問をぶつけてみた。すると、自分はそのデモ隊のリーダーだった、という答えがポロツと出てきたのです。バル判事はそのときにいましたかと訊いたら、「いた、彼は勇気のある人だ」との答えです。このエピソードについては『バル判事』をぜひ参照していただきたいのですが、これで私の、バル判事はチャンドラ・ボースとインド国民軍の支持者だったという説は完成しました。九〇歳を超す老人が、このときとばかり眼を輝かせて語ってくれました。実に印象的でした。

こんな具合で、インタビュー調査はいろいろな偶然が重なって可能になったということがあります。文献調査についてはいろいろ言うべきことがあります。時間がおさまったので、ひとつだけにおきます。

『バル判事』という本を書いた人は別の本で、インドの国立公文書館には、東京裁判にインドから誰を判事として派遣するかをめぐるやりとりを示す文書が保管されているが、これらは「今でも原則的には非公開で、引用することができません」と書いています。これは何かの誤りに違いありません。国立公文書館では、文書の裏表紙に利用した研究者の名前と利用日を書き込むことになっていきます。それを見れば誰がつ利用したか一目瞭然なのですが、当該ファイルは、一九九〇年に最初の一連の閲覧があり、そのつぎが二〇〇一年となっております。私は〇八〜一〇年に三回見えています。

なお、私は非公開の文書を無理して見るようなことはしたことがありません。いわんや、文書館が非公開に指定している文書の内容を、論文に書いてしまうというような不正行為はしたことがありません。私はこれまで、公開された文書だけに基いて論文を書いてきましたし、それは、『バル判事』についても同じことです。私の場合は、それで十分と考えてきました。非公開のものもあるかもしれませんが。しかし、たいいていことは公開された文書から推測できるものです。

●社会的責任——分化する知識人

社会的責任という問題に移りたいと思います。知識人の社会的責任をめぐる議論は、一九六〇年代までは非常に活発に日本で行われていました。先ほどお話しした仁井田陞の話は、ほんの一例にすぎないわけです。戦争という巨大な出来事に対して、知識人がどのように向き合うかをめぐって、様々な議論がありました。革命運動、労働運動、反戦運動、反核運動、反公害運動等があり、これらの運動と知識人の関係についてもたくさん議論がありました。ところが、七〇年代からは議論が低迷している感じがします。この変化は、現在あらためて社会的責任の問題を取り上げるのならば、新しい角度からアプローチする必要のあることを示唆していないでしょうか。七〇年前後以降に起こった社会変動はやはり非常に重要で、知識人の社会的責任の問題を考えるとにも考慮しなければいけない。状況は変わっているわけですから、新しい状況に沿って社会的責任論を組み立て、社会的責任を果たす新しいスタイルを編み出すべきでしょう。六〇を過ぎた人間を連れてきて話をさせても仕方がないわけです。歴史は繰り返しませんから、昔話は役に立たない。

しかし、ご要望ですので考えてみますと、私は、知識人は二つに分ける必要があるような気がします。レイモンド・ウィリアムズという人が書いていることなのですが、イギリスの大学では研究者は二つに分けて考えられているそうです。まず、スペシャリストあるいはプロフェッショナルと呼ばれるグループがある。皆さんや私みたいな人間ですね。大学の一般教員で地道に個別研究をやっている人間、あるいは研究所で毎日資料を見てレポートを書いている人たちです。それに対してインテレクチュアルと呼ばれる人たちがいる。専門を越えて一般的なことについても発言する人々です。同じようなことをフーコーも言っていて、彼は、スペシフィック・インテレクチュアルとユニヴァーサル・インテレクチュアルの二つに分かれるとしています。

言い換えれば、知識人一般の議論というのはもはや成立しない。フーコーは、スペシフィック・インテレクチュアルの人々が様々な矛盾を抱えて苦しんでいると指摘しています。現代社会は情報化が進み、第三次産業がどんどん肥大化してゆく。スペシフィックなことをやる知識人の人口もどんどん増えてゆく。そういう社会変化が、新しい問題を生んでいるという認識があるわけです。社会的責任論に引きつけてこれを言い換えれば、戦後しばらくの間まで、インテレクチュアル、あるいはユニヴァーサル・インテレクチュアルに当たる人たちが、知識人を代表して、社会的責任の重要なところを引き受けていたわけですが、世の中は変わり、知識人は分解してしまいました。それにつれて、情報化に翻弄され悩んでいる、スペシャリスト、プロフェッショナル、あるいはスペシ

フィック・インテレクチュアルと呼ばれる人たちの、社会的責任の問題が浮上してきているようです。

●しばりベラルな公共圏、進む研究のシステム化

二番目に、現在の日本社会をどう見るかという問題があるかと思えます。偉い人の言説にばかり頼って気がひけますが、ハーバマスは、リベラルな公共圏が存在するということが、知識人の活動の基盤としてあるとしています。つまり知識人というのはリベラルな公共圏に住み着いた人たちだということです。しかしそういう場が現代の日本社会ではだんだん縮小してきている。その顕著な例が、論壇が衰退したことでしょう。ある共通の問題について、違う立場の人たちが議論を戦わすことが、少なくなってきた。

それから七〇年代以降、とくに八〇年代以降、日本的なポスト・モダニズムが盛んになり、それとセットで自己愛的な傾向が出てきている。それに対して違和感を持つ人は多いと思います。ポスト・モダニズムそのものは別に、それにくっついてくる自己愛、ナルシシズムはかなわないという人は多いでしょう。新しいタイプのナシヨナリズムです。「近代の超克」論を現代に持つてきて主張する人たちがいます。あるい

は、日本はポスト・モダンの最先端にあるという、能天気なことを言う人たちも、少し前まで実在しました。

日本ではポスト・モダニズムはナルシシズムとセットになる傾向が強い。しかも、さきほど「サバルタン・スタディズ」について言ったように、海外ではポスト・モダニズムは体制批判でもあるのですが、そのところがきれいに切除されて無力化されてしまっているわけです。そういう形でポスト・モダニズムがもてはやされている社会が目前にある。斬新な切口で自由闊達に議論をしているように見えるが、肝腎の公共の場というのは縮小している。論争の衰えたところで、ナルシシズムがじわじわと広がっている。社会的責任論が出てくる背景には、こうした日本社会の変化への違和感があるのかもしれない。

第三番目に、スペシフィックな研究や業務をする研究者＝知識人を囲む環境が、いかに変わってきたかということも、考えなければいけないでしょう。研究制度というものを考えたときに、一九八〇年代から著しい変貌を遂げているわけです。国立大学は国立大学法人化した。アジア経済研究所も全然違った研究所に変えられてしまった。そのなかで業績だけは求められるようになった。業績主義というのとはなかなか反駁しにく

いのですが、私は、今や行き過ぎてしまっていると感じています。文科系の学問では真正の革新というのは難しい。正しい業績評価というものも残念ながら難しいわけです。でも、

独創的な業績をあげることが称揚される体制が無理矢理作られて、その結果何が生まれているか。一方に似而非独創性を主張する一群の人たちが出現し、他方に大勢順応主義に流れる人たちがどんどん増えているように思います。それにブレイキがからなくなってきたという感じがします。全般的に言って、どこか研究がおかしくなってきた。ガラパゴスのようなものがそこかしこに現れて、まだ大勢になつていないのではないが、将来が心配な感じはあります。もう少し述べますと、文科系の研究でもシステム化が進行しているかと思えます。研究の制度として大学・研究所があり、学会があります。地域研究に関しては大型プロジェクトというのがあって、なかば恒常的な制度として定着しています。それから、勲章や××賞のような報奨制度があります。かなり個別分散的に行われてきた研究が、それらを軸にしてゆつくりとシステム化されつつある。それが研究者個人にとつて息苦しさの背景になつていっているのではないかと思います。

そして、ここでは社会的責任では

なくて、社会的貢献ということが言われている。社会的責任と社会的貢献とは似たような言葉ですが、使われるコンテクストが違う。社会的責任という言葉は、知識人が世の中の動きに対して批判的な立場をとつて

いることを前提にしている。ところが、その言葉がいつの間にかどこかへ行ってしまいました。私がここの発表を引き受けようと思ったのは、「社会的責任について語ってくれ」という発想が、今時珍しいと思っただからでした。それくらい世の中が変わってしまった。

大型プロジェクトについて補足しておきますと、私にも大型プロジェクトに関わつて齟齬あぐましていた時期がありました。その頃のことですが、誰か海外から招聘しようというときに、アマルティア・センの協力者であるドレーズを呼ぼうと思ひ、デリーで会つたことがあります。ドレーズはとても質素な身なりで現れ、デリー大学のキャンティーンへ連れていってくれました。そこでお茶を飲みながら、日本への招聘の話をしました。説明を一通り聞くと、この人は実に物静かな口調で「あなたのプロジェクトというのはとても日本的ですね」と言うのです。私は意味が分からなくて、「日本的とはどういうことですか」と訊きました。すると「だって軍隊的じゃないです

